

# 白楊ヶ丘 札幌

## 総会にむけて

札幌支部 支部長代理 荒川 伸夫

(第六八期・昭和四一年卒)



同窓会の皆様におかれましてはお変わりなくお過ごしのことと存じます。

同窓会の活動には常日頃ご協力賜わり心より感謝申し上げます。

この三月一日に挙行された中部高校卒業証書授与式に出席してきました。

六クラス二三九名の卒業生の皆さんの晴れやかな姿を拝見し、往時の自分のそれと重ね合わせました。夢を抱きそれぞれの道に進んでいくのだとの決意が感じられました。その後行われた五島軒での同窓会入会式。一一四期生はめでたく同窓会に入会していただきました。札幌支部でも多くの若き新入会員を歓迎いたします。

さて、話は少し大きくなりますが、日本の抱える少子高齢化、生産年齢人口の減少傾向、デフレ脱却、消費税増税、年金制度の改革、などなど直面している問題は枚挙にいとまがありません。

同じように、札幌支部の抱える問題は参加会員の減少傾向、会費収入の落ち込みによる支部会計の慢性的赤字等があげられます。先輩たちがご苦労されて立ち上げ、連綿として続き、三二年目を数える札幌支部の今後の運営を考えた時、これらの問題を解消し、魅力ある支部であり続けなければなりません。今回入会された一一四期生が中堅になり社会の中核として活躍している少なくとも数十年後にも存続し続けなければなりません。同窓会が気軽に集い、先輩・後輩それぞれが関係なく和気藹々とした関係性を持っていける同窓会運営にご協力いただきたいと思ます。

今年の総会・懇親会は八〇期代、九〇期代の同窓生がこの会のためにわざわざ「函中OBバンド」を結成していただきました。世代をこえた懐かしく楽しい演奏を披露してもらえそうです。若い世代のエネルギーを支部運営にも発揮して頂き、今後の活躍を大いに期待いたします。



# ホームページの開設

## 白楊ヶ丘同窓会



会長代行

石井直樹

(第六三期・昭和三十六年卒)

白楊ヶ丘同窓会札幌支部  
定期総会・懇親会のご盛会  
をお慶び申し上げます。

皆様には、日頃同窓会の  
運営など諸活動に携わって  
おられることに心から敬意  
を表します。

また、お忙しいところ本  
部の総会や懇親会にご出席  
いただきました他、この三

皆様には、一日も早く日常  
の生活に戻れることを願っ  
てやみません。

この一年全国各地で大き  
な地震の発生やゲリラ豪雨、  
竜巻など以前には考えられ  
なかった自然災害の多発が  
危惧されるところでです。

さて、遅ればせながら、  
この度待望の函館中部高校  
同窓会（白楊ヶ丘同窓会）  
のホームページを開設いた  
しました。

まだまだ、情報量は不十  
分ですが、各期ごとあるい  
は先輩、後輩の皆様とホー  
ムページを媒体として情報  
公開はもとより連携・連絡

を密にさせていただければ幸  
いです。

現在、同窓会としては、  
二つの課題があります。

一つは、的場町にありま  
す函中百年記念館（同窓会  
館）の維持・存続でありま  
す。建物の老朽化と生徒の  
使い方の変化に伴う不向き  
により、使用頻度が減少し、  
今後の同窓会館のあり方に  
ついて、早急にその考えを  
取りまとめる必要があります。

二つ目は、総会・懇親会  
の出席状況です。  
昨年の札幌支部総会・懇  
親会に出席させていただき、

幹事の皆様のご努力により  
大変楽しく気持ちがあいま  
ましたが、何と言いましても  
百期代の同窓生が多数出席  
されていたことが目をひい  
たところです。本部といた  
しましても八十期から百期  
代の出席者の増が課題であ  
り何らかのヒントを得た感  
じがしました。

終わりになりますが、白  
楊ヶ丘同窓会札幌支部のま  
ますのご発展と荒川支部  
長（代理）をはじめ会員皆  
様のご健勝、ご多幸を祈念  
申し上げます。

# 東京支部だより



白楊ヶ丘同窓会東京支部長

安田康次

(第六七期・昭和四〇年卒)

白楊ヶ丘同窓会札幌支部  
皆様方におかれましては、  
その後、お変わりなくお過  
ごしのことと存じあげます。

昨年は東日本大震災及び  
福島原発事故があり、各種  
行事日程もその影響を受け  
ましたが、発生から一年半

以上たつ今日に至っても、  
いまだ完全復興にはほど遠  
い状況であります。同窓の  
皆様も色々な形で支援され  
ている事と思いますが、一  
日も早い復興をお祈り申し  
上げます。

さて、東京支部では、昨  
年一〇月に第三五回親睦大  
会を八一期（昭和五四年卒）  
の方が幹事期となり、一昨  
年同様、お茶の水「ホテル

ガーデンパレス」で開催い  
たしました。本部・支部及  
び在京他校同窓会役員の方々  
のご臨席を賜り、二〇〇名  
以上の参加をいただき、盛  
大な会を開くことが出来ま  
した。札幌支部の方々にも  
ご出席戴き厚く御礼申し上  
げます。

今年度の東京支部懇親大  
会は八二期（昭和五五年卒）  
の方が幹事期となり、早く

から準備を進めてまいりま  
した。今年は新宿「京王プ  
ラザホテル」で九月三〇日・  
日曜日に昨年より一ヶ月早  
く、場所も変わり開催とな  
りました。イベントでは久  
しぶりに講演会を開催、六  
五期・渡辺憲司氏（立教新  
座中学・高等学校校長）に  
お願いいたしました。素晴  
らしいお話を聞く事が出来  
ると楽しみにしております。

札幌支部の方々でご都合つく方は是非ご出席下さい。心よりお待ち申し上げます。東京支部では他支部と多少異なる活動をしておりません。

一つは、東校・西校とのゴルフコンペ（函館巴会）を年一回、四月に開催しており、団体戦（各校一〇名程度）で交流を深めております。残念ながら今年是最下位と振るいませんでした。二つ目は函館臥牛会と言

う在京公立高校五校（東校・西校・商業・工業・中部）の交流を積極的にを行い、同窓会活性化に向けた意見交換、情報収集などをしております。

三つ目は親睦大会に先上げた四校のほか、ラサー校役員をご招待し、お互いに親睦大会の良い点を見習うようにしております。各支部ともいろいろな課題を抱えていると思いますが、東京支部の多くの課題は以

前より申し上げておりますが、年会費納入者の長期減少、親睦大会の参加者拡大、安定した東京支部事務所の設定等、難しい問題でなかなか解決への道筋が出来ておりませんが、評議員、理事のご協力を得ながら努力しております。

又若手スタッフを中心にインターネットを活用し、ホームページの充実に環境を整備、支部の活動をPRして、所在不明の方でも連

絡できる体制を整え、会員拡大を図っております。このホームページから同窓会の存在を知り、親睦大会への出席と繋がりました。尚、事務所に関しては、

同窓会は若い方の参加者が少しでも多くなることと同窓会支部を盛り上げる最

大の効果と思い、又ご年配の方々にも楽しめる同窓会を目指し、伝統ある白楊ヶ丘同窓会を盛り上げていけたらと思っております。

最後になりますが、白楊ヶ丘同窓会札幌支部の益々の発展と荒川支部長代理はじめ、役員の皆様、札幌支部の皆様のご健勝を祈念申し上げます、七月の再会を楽しみに、ご挨拶とさせていただきます。

## 期待に応える人となれ



校長  
小林 雄 司

白楊ヶ丘同窓会札幌支部の皆様には、日頃から本校教育の振興と教育活動へのご支援、ご高配を賜り感謝申し上げます。私も早いもので三年目となりました。

本校中部高校の校長は本校のみならず道南支部長とし

て渡島・檜山両管内の取りまとめ役の仕事もあることから忙しい毎日であるとはいえ、時間の早さを実感するこのごろです。

さて道南は少子化の大きな影響を受け、昨年度閉校の木古内高校、今年度閉校

の瀬棚商業高校、閉校予定の戸井高校など、統廃合や稜北高校三間口、長万部高校商業科閉科など、小規模化の対象となる高校が多くなる中、本校が百十七年もの間、伝統を受け継ぐ学校としてあり続けることに誇りを感じ、一層身の引き締まる思いと次にしっかりとしたものを渡していく責任を感じている次第です。

今年度の進学実績につきましては、一学年六間口にもかかわらず九間口以来の百名を越える現役国公立大

学合格者数を出し、内容についても札幌医科大学医学部医学科への複数進学や北大合格者数の増加（このことは雑誌にも取り上げられています）等、右肩上がりでありますが、諸先輩方からはまだまだやれるはずだと叱咤激励されそうですので、まずまずだったと評価しておきたいと思っております。

さらなる生徒の意欲向上のために、諸先輩による講演会等を積極的に取り入れたりと各学年、進路指導部とも考えておりますので、そ

の際はご協力の方をよろしくお願いいたします。また、部活動におきましては、野球部・サッカー部の全道大会進出を始め、弓道部は男女で支部優勝を果たし全道進出さらにその中で相沢君が全国六位入賞、陸上の久保君が国体道代表選考会で一〇〇m自己新で優勝、卓球部の山中君が男子個人単で全道制覇、全国進出、全国常連の放送部がNHK杯で創作テレビドラマ部門全国二位、将棋部が男女で全国出場、パソコン

部の全国出場等々、週三日

間七時間授業をして時間の

ない中よく頑張っています。

そのせいか最近の中部高校

に対しては、活気があり勢

いを感じるといういろいろな方

から言われるようになりま

した。私自身はここ三年間

しかわかりませんが、確か

に先生方の雰囲気はチャレ

ンジ精神旺盛であり、生徒

のためになることなら何で

もやるといふ気概を感じま

す。先生方自身が道南の中

心校としてのプライドをも

ち、本校に愛情を感じ生徒

の指導にあたっては生徒

は生徒達にとって大変幸せ

なことだと思えます。

一方、生徒達は純朴であ

り何事にも真面目に取り組

んでいきます。向上心が高く、

積極的に文武両道、男女共

学の良さを理解し、高校生

活を大いに楽しんでいこう

という高校生らしい姿勢が

見えます。本校でしか味わ

えない伝統行事、五稜郭公

園堀の水泳大会にルーツを

もつ校内水泳大会、一〇〇

年余り続く函中柔道大会を

今でも生徒達が大切にしてい

ます。先輩、後輩の絆と

なるこれらの行事を始め、

白楊祭や耐久レース、英語

教育の一環である一年のス

ピーチコンテスト、二年の

スキットコンテスト等々を

通して、きつと将来、グロー

バルでたくましいバランス

のとれたリーダーになると

確信をし、期待もしている

ところです。私が中部高校

生に常々言っている言葉の

一つですが、「選ばれたも

のにはそれに応える義務が

ある。」頑張ってください。

しかし今の状態で満足し

ているわけではありません。

矢継ぎ早ともいえる教育諸

問題、特に低いとされる北

海道の学力向上に関する学

校への要請に対し、道南の

一翼を担い学力の指標とし

て牽引している函

館中部高校の使命

は重要であり、真

摯に伝えなくては

いけないと感じて

います。ここでも

同窓生のお力添え

を頂きながら、同

窓生の皆様が本校

を卒業したことに

一層誇りとなるよ

う努力していきま

いと思えますので

温かく、時には厳

しくご指摘してく

ださいますようお

願いいたします。

## 同期会紹介

# 卒業四五周年修学旅行

飯塚 優子

(第七〇期・昭和四三年卒)

五月一八日、突然封書が

届いた。差出人は白楊ヶ丘

同窓会札幌支部会報担当幹

事様からで、内容は、函中

時代の回想等々原稿執筆依

頼というもの。締め切り六

月一五日とある。

もう、無理……

というのは、明日「京都・

奈良の旅」の準備をしてい

るところである。「えっ！

何でこの時期に？これは、

運命の依頼！」(ちよっと

大げさ)。このことは、少

し説明が必要である。

今からもう四五年前、私

は高校二年の時に奈良・京

都への修学旅行をさぼって

しまった。当時は、そんな

ところはいつでもも行けると

思っていたのに、人生の三

分の二も過ぎようとしてい

る現在まで一度もその地に

行くチャンスに恵まれず、

明日、その念願が叶うとい

う瞬間であった。それも今

回の旅は、主人の同期会、

大卒四五周年(私も四五周

年)、奈良・京都への同伴

の修学旅行？という企画へ

の参加だった。私に「高

校時代の)反省文を書きな

さい」とうことかな？

ついに五月一九日、この

重たい宿題を抱えながら、

千歳一〇時三〇分発の便で

京都へ旅立ったのである。

昨日から例の作文のことで

頭がいっぱいだ。この二時

間のフライトの中で、高校

時代を振り返ってみた。

まず、私は、さぼったも

のは修学旅行だけではない。

遠足は殆ど不参加。学校祭

も一年の時、仮装行列なる

ものに出ただけ。最後に何



と卒業式も欠席！入学してすぐ合唱部に入団したものの、三か月で退部……。遅刻、早退もしょっちゅう。学校の玄関で「加藤茶」と言われていた人気の物理の先生に、何時も身分証明書を取られ、「あなたの家に行きますよ！」と叱られ、「どうぞ、いらしてください」と答えて呆れられた。今度こそ身分証明書を取れないようにと、五分遅刻を一五分遅刻にし、正面玄関（生徒玄関はかぎが掛けられている）から入ると、廊下で倫理社会の福津先生が授業に向かうのに会ってしまい、「ゆっくりですネー！」と言われる始末。

めには、ちょっと工夫が必要であったが、ここでその方法は語ることはできない。努力して獲得したあの肉なし魅入りラーメンの味は忘れられない。

さて、ここまで何人かの先生が登場されたが、中部高校には、立派でユニークな先生が、たくさんいらしたと思う。もし、夏目漱石が我が高校に赴任していたら、相当の有名校になっていたに違いない。それに並ぶ先生方がいらした。

一優秀な先生方がたくさんいらした。だから優秀な生徒が（私は違う！）たくさんいたんだよとおっしゃっていたことを思い出す。また、お名前を忘れてしまったが、何故か「パン屋」と呼ばれていた英語の先生。数学では、何も教えてくれない対馬先生。とても教え方が親切な「寺忠」の寺田先生。授業中、チョークが飛んでくる浅間先生には、旧制中学時代の魂を感じた。古典は、日本昔話？（ご自分の思い出話）がおもしろく、得意でいらした杉江先生。生物は、こよなく中部を愛されていた「グロカン」の黒澤先生。「ワガッタガー！」という独特の東北弁に近

い函館弁。地学は、「ピテカン」？の井沼先生には札幌でよくお会いしたが、「中部高校生は優秀だった」と言ってお下さって、とても嬉しかった。地理では、背の高い南先生。「米価政策についてレポートを書け」など、大学の授業みたいであった。日本史は担任の「ガッツ」の浜岡先生。最後に、忘れられない体育の溝江先生。

出す。中部高校で学んだのは「自分で考える事。そして、全て自己責任である」ということ。

思いつくままに、おしゃべりをしてしまったが、機内のアナウンスでは、着陸態勢に入り一二時二五分に到着とのこと。空から見下ろす関西の風景は、格別。今、私の待ちに待った卒業四五周年奈良・京都修学旅行が始まるうとしている。

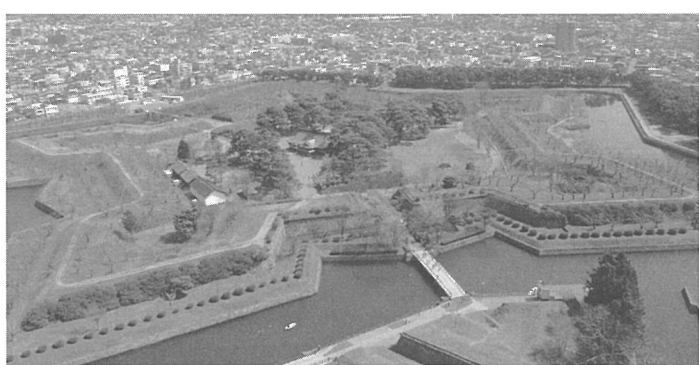
何時も進路の相談にのってくださった「消防自動車のSHOULD」の浄土英二先生。（先生には卒業後お逢いした時、「当時、中部高校には、英数は、全道

分の思い出話）がおもしろく、得意でいらした杉江先生。生物は、こよなく中部を愛されていた「グロカン」の黒澤先生。「ワガッタガー！」という独特の東北弁に近

三の春には進路を決めなければならず、迷いに迷い薬剤師をあきらめ音楽家の道に進むことになった。この時に、音楽の大森清先生には、大変お世話になった。毎日、五時間のピアノ練習。東京、札幌へのピアノレッスンに通う日々。

現在、私は、小中高生とかがわる仕事をしている。最近、不登校や発達障害、横文字の病名？が付けられている生徒が、よく私のところに来るのである。そんなとき、私はいつも高校時代の自由だった自分を思い

山石もあり木の根もあれど  
 マンサクマンサクとたたきマンサクマンサクと  
 水のははるるる  
 1999.6.18  
 早坂 誠二



# 思い出の恩師

中村 大輔

(第一〇四期・平成一四年卒)

昨年、仕事柄、縁のあった一〇〇期の綱森史泰先輩から勧めで、初めて参加した札幌支部の同窓会。札幌では、たくさんの同窓生が活躍されており、大学で札幌に来てからの一〇年間、

このような席に顔を出していなかったことを少し後悔しました。私ども一〇四期は、高校卒業以来、札幌に進学したメンバーで定期的に顔を合わせることもあり、それは一〇年経過した今もなお、続いています。これからは一〇四期がもっともっと同窓会札幌支部に貢献できるような頑張っていきたいと思っています。

さて、私が函館中部高校に入学したのは一九九九年四月のことです。中森司先生が学年主任で、七クラス二八〇名の新入生でした。

中森先生は、高校一年生のときと高校二年生のときのクラス担任で、世界史・日本史の教科担当としても三年間かかわることができました。また、二〇〇四年には、教育実習生として再び母校に訪れ、五週間にわたる教育実習を指導してくれました。私は現在、札幌市内の私立中学・高等学校で地歴・公民科教諭をしており、恩師に憧れ、教職の道を目指し、今こうして教壇に立つことができていることを嬉しく思っています。偉大なる恩師の姿に、一歩でも近づけるようにと「日々是努力」です。教員経験も七年目を迎え、昨年今年と二年連続で高校三年生のクラス担任をしております。函中時代の進路指導をイメージしながら、「自

由と責任」を生徒に伝える毎日です。将来、社会のリーダーとなる人材を養成する教育は難しい面も多々ありますが、充実しています。そのような教師観も中森先生をはじめとする多くの先生方とのかかわりの中で培われたものと思います。

この度は、昨年の同窓会の際に長谷川先輩から支部報原稿の依頼がありまして、中森司先生との思い出のページを開いてみたいと思います。

一つ目は、「ワンダーフォーゲル部」です。中学校からバドミントンをやってきた私ですが、高校一年生のときから毎日、中森先生と接し、顧問をしているワンダーフォーゲル部への入部を強く勧められました。土日中心の練習や大会のため、バドミントン部との両立ができました。一度、道南に位置する大千軒岳の登山を経験したことで、山の魅力に惹かれ、大会参加をするまじになりました。山岳の大会は四人一組の参加ですが、

部員は私だけで、大会は友人を誘っても四人集まらず、毎回、記念参加でした。天気図の作成、筆記試験、行動テスト、テントの設営など数多くの審査項目に、体力以上に知力を要求されました。特に一年生の時に登った羊蹄山は、中森先生と生物の堀江先生と私の三人での登山であったため、一生懸命、中森先生の歩くペースについていった記憶があります。「山の神」という異名をもつ中森先生ですから、その歩く速さは想像にお任せします。さて、そのような登山も「楽しみ」があります。一つは頂上からの景色です。頂上にたどり着いた者にしかわからない達成感と、頂上からの眺めは、それまでの辛いことを一気に忘れさせるひとときです。そして、あの景色がまた次の登山へといざなうのだと思います。もう一つは、登山帰りの「温泉」です。私たちは別名「温泉部」とも呼んでいました。登山後の汗を流すのに、ご当地

の温泉に寄って帰ります。函館育ちですから、温泉の醍醐味はよくわかっています。特に羊蹄山のふもとにある「真狩温泉」の露天風呂からの羊蹄山は絶景です。二つ目は、高校二年生のクラスです。高校一年生のときに同じクラスだった友人が一人しかいない中、担任は引き続き、中森先生でした。学校祭や修学旅行を経てもなかなかまとまりがなく、学力も七クラス中最下位といったクラスでした。しかし、ある冬、級友の片山幹雄くんから、「函館市の「ミニクラシックコンサート」にクラス合唱で出ないかとの話を提案されました。学校祭のクラス合唱では惜しくも二位となったクラスで、合唱はおもしろいと思

い、二人で協力して仲間を増やしました。約二〇名の級友が集い、「時の旅人」と「スカボロフェア」を練習し、本番に臨みました。指揮は、社会科の小岩先生にお願ひし、担任の中森先生も観客席で見てくださいまし

た。この合唱を機にクラス  
のまとまりが生まれ高校二  
年生の学年末試験にむけて  
は、みんなで放課後勉強し  
たり、各教科を得意な友人  
が定期試験の予想問題を作  
成し配布したりするなどし  
て頑張ったところ、学年最  
下位のクラスが学年二位に  
なったのです。このとき、  
私たちがやや暴走気味にやっ  
ていたことを、中森先生は  
暖かく見守ってくれていま  
した。このときの経験や達

成感が、高校三年生の時の  
受験勉強への自信となり、  
最終的には、私が今、教職  
として、生徒に関わる際の  
スタンスになっているのだ  
と確信しています。  
三つ目は、「日本史・世  
界史」の授業です。先生か  
らは高校一年生のときに  
「世界史」を、高校二・三  
年の時に「日本史」を習い  
ました。今、地歴・公民科  
教諭としてこれらの科目を  
生徒に教える立場になって

改めて、先生の知識量、指  
導技術に感銘を受けます。  
単に「覚える」のではなく  
て、「理解する」ことを大  
切にした授業と、センター  
試験や模擬試験の正誤問題  
を一〇〇〇問近く解いた講  
習は、今の私の知識の土台  
となっています。授業のプ  
リントや問題のみならず、  
先生の学年通信や学級通信  
も今でも大切に保管してい  
ますし、自らが作成する学  
年通信や学級通信の参考に

させていただいています。  
最後に、中森先生は二〇  
一〇年三月に母校を定年退  
職されました。このとき、  
一〇四期の約四〇名が函館  
のホテルに集まって、先生  
を慰労する会を行いました。  
一〇四期にとっても久しぶ  
りに会う「プチ同窓会」と  
もなり、先生にも喜んでも  
らうことができました。卒  
業直後は、母校に訪れても  
先生が温かく出迎えてくれ  
ました。退職後は、なかな

か足を運ぶことができませ  
んが、後輩に会うことがあ  
ると「中森先生知っている？」  
が話のスタートです。  
一〇四期は、それぞれの  
仕事の合間でも月一回のペー  
スで定例会を開催していま  
す。そこでの話題に「中森  
先生」が出ないことはありません。  
同期の結婚式にも  
中森先生は欠かせない存在  
となっています。恩師・中  
森司先生のご健康とご多幸  
を心より祈念申し上げます。

## 同期会紹介

# 還暦雑感

## 伊 東 和 紀

(第七二期・昭和四五年卒)

当紙の編集者から、七月  
に発行する会報に寄稿をと  
の手紙が届いた。昨年の方  
合の際にそのような依頼を  
受けていたのを、実はすっ  
かり失念していた。残され  
た期間は一月足らず。リ  
クエストは、高校時代の思  
い出をと言うことだったが、

一年前のことすら覚えてら  
れない身にはとても無理な  
相談。と言うことで、還暦  
を迎えたこの一年の日記に  
少し手を入れて何とかお許  
しをいただくことになった。  
〇月〇日 三七年間勤め  
た役所を退職し、今日から  
再就職で新しい職場に。世

間では天下りとも呼ばれて  
いるが、現実はその甘に甘  
いものではない。社長から  
辞令を受け取ったときには、  
学卒の新人社員同様、全身  
に緊張が走る。還暦を迎え  
る自分が未知の職場で一体  
どんなお役にたてるのか不  
安もあるが、とにかく、縁  
があって迎えてもらった職  
場だ。これまでの経験を生  
かして精一杯頑張らなけれ  
ば。

マで沢山の仲間が集まった。  
還暦を第三の二〇歳と言っ  
るのは、フランス流だそうで、  
伝統や文化、つまりは時間  
の経過を大切にす民族ら  
しい言い方だ。そんな気分  
で集まった仲間、初めのう  
ちは、テーマに合わせて、  
まだ頑張っている数少ない  
現役組の噂や現役を離れて  
ようやく手にできそうな夢  
など、将来につながる話で  
盛り上がっていたものの、  
お酒が進んでくると、話題  
の多くは、加齢に伴って傷  
んできた身体のこと。誰そ

れが大きな病気をして再起  
不能のようだ、自分も最近  
血圧が高く、食べ物に気を  
つけている、といった情け  
ない話ばかりに。最後は、  
第四の二〇歳はちょっと難  
しそうだけど、次にまた再  
会できるよう健康でいよう  
ね、と慰めともつかない言  
葉で別れた。  
〇月〇日 左の奥歯のか  
ぶせモノが取れたので歯医  
者に行って作り直してもらっ  
た。削りすぎたせいかな神経  
に障って、冷たいものが耐  
えられないほどにひどく沁

みる。レーザーや薬であれこれ緩和対策を講じてもらったが効果はない。我慢するしかないというひたすら耐えていると不思議なことについての間にかあまり痛みを感じなくなってきた。治療が終わって数カ月は経っていたように思うが、何よりの治療は時間だった。そう言えば、腰椎ヘルニアの影響でもう一〇年も続いていた脚の痛みも最近では気にならなくなってきた。狭心症の疑いもあるほどだった胸の痛みは、どうやら逆流性食道炎とのこと。こちらも原因が分かればひどい痛みもいつの間にか慣れてしまう。この年になると時間が一番の薬なのかもしれない。

○月〇日 最近では読書の傾向も大きく変わった。書店に行っても読み易いもの、時代小説や歴史小説の類に目が行ってしまう。今日目についたのは、藤澤周平の「三谷清佐エ門残日録」。だいぶ以前、確かNHKの時代劇で、仲代達矢が主演していた記憶がありつい手が

出た。ある藩の要職を終えた主人公の余生を描いた小説だが、実際は静かな日々どころではなく、現役時代のしがらみから様々な事件に巻き込まれていく。「日残りテ昏ルニ未ダ遠シ」というのがこの題名の由来とされている。同じ境遇からつい手が伸びたものかもしれない。泊原発へのプルサーマル導人を巡って起こった北電のヤラセ問題について行政の関与が問われた。当時その業務に携わっていた身にとっては降ってわいたような冤罪だったが、同僚とともに当時のことを思い起こしながら、検証のための調査に対応し、漸く事なきを得た。

○月〇日 新しい会社に移ってからは、健康を考慮して通勤は徒歩にしている。その四〇分弱の時間には、毎日何かしら気がつくことがある。あそこの銀行の支店は、ゴミ拾いや除雪など社員が地域活動に一所懸命だ。(通勤途上にある別の支店ではそんな光景を見た

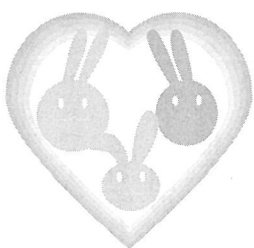
ことはない。) ○〇駅の付近は、喫煙しながら歩行する人が多い。えー化粧しながら自転車に乗っている女性がいる。(電車の中では良く見かける光景だが、さすがに自転車というのは初めて。) などなど。そんな中で、歩道橋が歩行者にとっていかに大きな負担になっているかを改めて実感した。いつも通る道には、どうしても歩道橋を渡らなければならぬ箇所がある。下には横断歩道がなく、選択の余地はない。堂々と車道を横断している人はいるが、これはもちろん違反である。今日はこの冬初めて雪が積もったが、除雪されない歩道橋は冬山登山のように危険だ。道路管理者に改善を申し入れたところ、あの歩道橋はロードヒーティングになってるので、雪はもう融けているはずとのこと。それにしても早く下の道路を歩けるようにしてほしい。高齢者の切実な願いである。

○月〇日 高校時代にク

ラブの代表をしていた先輩が札幌に来るので、仲間が集まることに。予定の場所に出向くと、変な風体の初老の男性がうろろしている。もしかすると、様子を見ていると懐からおもむろにカメラを取り出して、会場を撮影している。宴会の席でも、皆なカメラを向けてコメントを求め面白がっている。そう、昔から独特の行動をとる変わり者の先輩だった。現在千葉県で幼稚園情報誌の編集・発行をやっている。物書きになるという高校時代からの夢を今でも失わずにいる尊敬すべき人物である。後ろから、先輩、お久しぶりです、と声をかけるともう時代は四〇年前にタイムスリップ。あっという間に三時間が過ぎ、再会を約束して別れた。

○月〇日 三月に学校を終えた娘が、就職を機に家を出ると言う。昨年から妻が転勤で家を出ているので、この家に一人残されることに。始めは、一人暮らしの経験もない娘が心配で、あ

れこれと注意をしていたが、娘からは、友達の多くも一人暮らし、心配いらないと軽く受け流されてしまう。新居が決まり、必要な家財道具も揃って、いよいよ家を出る日が近づいてくると、こちらの方の寂しさが募ってくる。単身赴任の経験もあり、まだまだ一人暮らしに何の心配もない、と強がってはみるが、内心はやはり不安が付きまとう。逆に、何かあればいつでも戻ってくるからね、と娘から慰められる始末。親が子供を心配していたはずが、いつの間にか、子どもに親が心配されている。娘の自律を通して、親の自律度が問われることを実感した顛末だった。





# 近況・短信

振替用紙のメッセージから

◆堀内 智江

(八〇期昭和五三年卒)

同期の池田さんのバンド演奏、残念ながら聴けません。どうか頑張ってください！

◆野呂 佳生

(八〇期昭和五三年卒)

今年三月より札幌へ引っ越ししてきました。よろしくお願ひします。

◆笠井 博

(七〇期昭和四三年卒)

三月末を以って、退職しました。

◆尾張 浩之

(七六期昭和五四年卒)

当日、出張のため不在です。申し訳ありません。ご盛会をお祈りします。



五稜郭タワーから見た校舎

◆知野 学

(八八期昭和六一年卒)

今回初参加です。よろしくお願ひします。

◆秋山 重穂

(六九期昭和四二年卒)

所要のため欠席します。当方は、今年も植物観察のため、野山を散策しています。

◆安藤 牧子

(六九期昭和四二年卒)

若さあふれる企画。とても楽しみにしています。

◆中村 大輔

(一〇四期平成一四年卒)

今年も楽しみにしております。

\* \* \* \* \*

## 恩師からの メッセージ

◆福地 順一

(昭和四六年国語)

案内状ありがとうございます。都合により出席できませんが、ご盛会を祈っております。

◆谷川 伸

(昭和一七年定時主事)

同窓の皆さんの、益々の多幸をお祈り申し上げます。

小生満九二歳になりましたが、なんとか元気に毎日を過ごしています。

◆池田 俊二

(昭和五五年教頭)

ご招待いただき感謝しております。今後とも札幌支部の益々の発展を祈念申し上げます。

◆西川 豊

(昭和五一年教頭)

ご丁寧なるご案内、誠にありがとうございます。不調のため集積できませんが、ご盛会のほどお祈りいたします。

◆山岸 和子

(昭和四五年英語)

高齢のため、どの会合もお断りしています。

◆上野 茂樹

(昭和三七年英語)

皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

◆樋口 隆士

(昭和四九年教頭)

ご案内ありがとうございます。都合がつかないので欠席します。盛会をお祈りします。

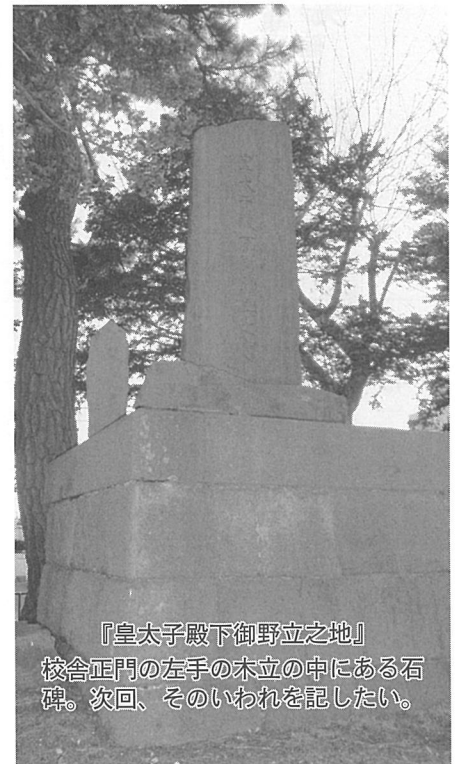
## 平成23年度収支計算書

### 【収入の部】

科目	金額	摘要
前年度繰越金	2,005,031	
年会費	364,000	182名
終身会費	145,000	10名
総会懇親会費	295,000	59名
広告掲載料	0	
雑収入	125,000	
預金利息	271	
収入合計	2,929,271	
収入の部合計	2,934,302	

### 【支出の部】

科目	金額	摘要
総会懇親会費	313,070	会場関係
講演会費	50,000	講師謝礼
印刷費	228,722	会報ほか
会員名簿作成費	0	
通信費	190,566	総会通知
旅費交通費	103,000	本部参加費
会議費	42,800	役員会
事務費	29,155	
振替手数料	22,960	郵便局
雑費	71,911	祝儀ほか
支出合計	1,052,184	
次期繰越金	1,882,118	
支出の部合計	2,934,302	



『皇太子殿下御野立之地』  
校舎正門の左手の木立の中にある石碑。次回、そのいわれを記したい。

懇親会特別出演

「函館中部高校OBによるバンド演奏」



メンバー Dr. 山口秀樹(友情出演) G&Vo. 池田雅則(80期)  
B. 牧野光記(92期) G&Vo. 渋谷健二(92期)

昨年11月、同窓会役員会で講演会などを検討中に飛び出したバンド演奏の話。早速、同好の仲間呼び掛け今年3月に結成したグループです。

同窓会の幅広い世代にお届けする「あの名曲」を楽しんでいただけたらと、特訓を重ねました。

函館中部高等学校校歌

作詞 函館中部高等学校教諭

藤原直樹

作曲 函館中部高等学校教諭

酒井武雄

一、火柱のはためく峰も

年古りて緑の臥牛

宇賀の浦風の砂山

波よせてくずれ流るる

見よや物なべてうつろふ

窮みなし流転の相

二、北の国雪深けれど

その底には草は芽ぐめり

野山荒れ鳥潜めども

やがて来ん春の光に

万象の蘇る見よ

ここにあり不滅の生命

三、白楊のささめく丘辺

秋深き梢仰げば

冴え渡る銀河の彼方

幽けくぞ星雲燃ゆる

胸に満つ久遠の思ひ

遙かなり真理の彼岸

四、限りなき流転の中に

生命あり不滅の学び舎

聞けや今窓の外遠く

新潮の入りくるひびき

よしさらば若人われら

踏まんかな希望の門途

函館中学校校歌

(同窓会歌)

作詞 第二高等学校教授

土井晩翠

作曲 東京音楽学校教授

岡野貞一

一、玄冥の北の一道

関門の岸に臨みて

青春の薫にしるく

基おく育英の場

二、集い寄る千余の子弟

人生の花の綻び

身を鍛へ心を練りて

向上の一路を辿る

三、宇賀の浦万頃の水

駒が岳千仞の山

微を積みて高きに至り

滴より空をもひたす

四、形ある無言の教

仰げ我が紅顔の子等

業成らば双の方の上

興国の運も負へかし

五、母校の名子弟の誉

花と香と常に伴ふ

任重く道の遠きを

嗚呼健児勉めざらめや

編集後記



◇編集人の私の手元に、白楊ヶ丘同窓会札幌支部会報「白楊ヶ丘札幌」創刊号からの通巻全てが揃って綴じ込まれているバインダーがある。会報編集時期になると開いて見ながら、投稿された同窓生の文中からは「函中」に寄せる郷愁を感じる。◇編集人三代目の小生(六九期)から四代目の佐藤君(一〇一期)にバトンを託したが、働き盛りで編集などに時間が取れない。小生も三〇代、四〇代は他に回す時間は無かったように思う。余裕が出来たら引き受けてもらおう。◇六〇年、七〇年と生きている中のたったの三年間の函中時代。今をもって同期会、同窓会として集いあい、再会を歓びあうのは何であろうか。わが福祿会も五月に、大沼で喜寿の集いを開催したが、全国から六三名の同期が集まり、時を忘れて語り合った。◇若い会員の皆様には、今は疎遠でも、いつの日か同期、同窓として「函中の、あの日。あの頃」を回想し、会報に一文を寄せてほしいと願う。

(長谷川雄助)